

通信簿

2020.12.28

私は、以前から作文コンクールの審査員を務めている。まだ教諭だった頃に、初めてある作文コンクールの審査員を務めた。審査会で福島県教育庁義務教育課の指導主事の方とご一緒した。その方が、表彰式で全体講評を述べた。その内容、話しぶりがすばらしく、メモを取り切れなかった私は、その方がつくった原稿が欲しくなってしまった。

ああいうふうに話したいと思ったものである。ずうずうしいというか、あつかましいというか、積極的というか、すぐにアクションを起こしてしまう私は、その方に「〇〇先生のお話は、大変勉強になりました。可能であれば、今日の原稿をいただけませんか」とお願いしてしまった。その方は、多少驚きながらも快く原稿をくださった。きっとこんなことをいう人は今までいなかったのではあるまいか。

その原稿を見ると、文字の大きさは10.5ポイントではなく、12ポイントだった。「なるほど文字を大きくして見やすくするのか」段落と段落の間は行間が空いていた。「なるほど、行間を空けて見やすくし、間を置くようにしているのか」などと勉強したことを覚えている。それ以来、しばらくの間、人前で話すための原稿をつくったときには同じようにしていた。まずは真似てみたわけである。

ただ、私とその方との大きな差は、原稿をつくり読んではいるのだが、あまり読んでいるようには聞こえないのである。私は原稿をつくり、それを見ながら話すと、読んでしまっている。それが嫌なので、原稿をつくっても、話すときには、その原稿を出さずに話すようにすることもある。そうすると、話す予定のことが抜けることもある。それでも、読んでしまうよりはいいかなと思っている。いつかは、原稿を準備しながらも読んでいないように話したいと考えている。

私と同じ作文コンクールの審査員を務め、私が原稿をいただいてしまった方は、現在は、福島市内の小学校の校長職にある。その後も、何度かその方のお話を聞かせていただく機会があった。その方がすごいのは、役職上よく挨拶をされるのだが、その短い時間の挨拶の中に、必ずメモしたくなるような言葉が入っているのである。例えば、「全国学力・学習状況調査の結果は、我々教育行政に携わる者にとっての通信簿です」なるほどと思った。

その方には遠く及ばない。しかし、話すことでも書くことでも、同じようにはできないが、自分の持ち味を生かしながら少しは迫りたいと思う。そのためには、これからも精進あるのみである。この校長室だよりのおかげで、だいぶ語彙力が復活し、考えられるようになった。書くことは考えることである。やはり教員は書いていないとだめではなかろうか。書かないと、力がダウンしていくように感じる。

あれからもう何年も経過したが、いまだに同じ作文コンクールの審査員を務めている。おかげで、1年に一度、審査の時期がくると、上記のエピソードを思い出すのである。そして、さほど成長していない自分に気がつく。これはこれでいい機会となっている。